博物館学雑誌 第30巻 第2号（通巻42号）117～128ページ 2005年3月

【報告】

学校が行う地域での「博物館」づくり

Building a Neighborhood Museum : School, Community and Museum Collaboration

西垣　亨*　　布谷　知夫*
Tohru NISHIGAKI　Tomoo NUNOTANI

1. はじめに　―博物館と学校連携の課題―

博物館と学校との連携については、1990年頃までは一部の学校の先生による熱心な博物館利用が中心で、それ以上にはあまり行われなかった。博物館の側からの博物館利用の対象者は、主としてテーマを持って博物館へ来る個人であり、学校との接点は団体見学以外では、グループで質問に来る小中学生などであった。

この当時までの博物館学の出版物の中では、学校の児童生徒による博物館見学については触れられていないか（倉田　1979、倉田（篇）　1979）、実物資料が学習に効果があるということが記述されている程度であり（富士川　1971、加藤　1977、田辺　1985など）、具体的な学校と博物館との連携の方法などについてはほとんど触れられていない。

一方で、文部省の意図としては、1971年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のありかたについて」や、1981年中教審答申「生涯教育について」、あるいは1990年の社会教育審議会「博物館の整備・運営のあり方について」などで、一貫して「学校教育と博物館との関係の緊密化」を提唱していた（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 2003）。しかし現実には博物館と学校との連携事業が一般的に行われるような例はまだまだ少なかった。

しかしその後、1998年の学習指導要領に「総合的な学習の時間」が記載されたことが契機になって、あるいはその準備期間に、総合的な学習の課題を解決するための学習の場や、地域学習や、「生きる力」の学習のための場として博物館が見直され、学校が博物館を利用する例が増え始めた。例えば『教師のための博物館の効果的利用法』（大堀　哲　1997）は、おそらく、博

＊滋賀県立琵琶湖博物館
平成17年1月28日受理

物館利用の仕方についての、学校教員向けの初めての出版物であり、主として博物館の関係者の手で書かれているものである。またこのころから、博物館利用に関する論文なども公開されるようになり、各地での学校連携の事業例を挙げた出版物『学ぶ心を育てる博物館－総合的な学習の時間への最新実践例』(博物館と学校を結ぶ研究会　2000) が発行されるなど、博物館と学校との連携についての実践例が取り組まれ、その報告（中山・他　1997、広瀬　2000、樽・他　2001など）も見られるようになってきた。

しかし、博物館と学校との連携事業については、まだ始まったばかりであるために、問題もあげられる。それは博物館から「出前事業」をする際であっても、あるいは子どもたちが博物館に来る場合でも、まだその連携事業が単発性なイベントのようになっているということである。実際の学習の効果よりも、連携事業をうまく進めること、そして大多数の場合には、博物館が持つ知識、情報を一方的に子どもたちに伝える場になりがちであった。それは新しく、緊急に進められた事業であったために、そしてその事業の面白さが先行してしまって、博物館の事業としての目的が曖昧になったためではないかと思える。博物館と学校との連携事業をうまく進めるためには、博物館の博物館らしさと学校の教育の場としての立場とが、両方とも生かせるような組み合わせ方やプログラムを考えることが必要と考える。

そのようなひとつの例として、琵琶湖博物館で行った「伯母川博物館つくり」のプログラムを報告し、博物館と学校との連携事業のあり方についての議論を進めたい。

2. 琵琶湖博物館での学校連携事業

琵琶湖博物館では、1996年の開館当初から学校との連携事業を積極的に行っており、その中の一つの活動として、来館した学校団体の中から希望のある学校を対象にして、本館で開発した体験学習プログラムの実施をしてきた。例えば2003年度は、来館した学校団体86,000人の中の、約12,000人の児童生徒に体験学習プログラムを実施した。その目的のひとつは、特定の知識を伝えることよりも、子どもたちが身近な自然や暮らしに対する興味関心を高めることであり、もうひとつは、博物館の体験学習で経験したことを、展示室の見学と結びつけることで、展示の意図を知り、さらには現実の野外のフィールドへ誘うことにある。体験学習プログラムの開発と実施は、「博物館を訪れた学校に対して、博物館は何ができるか」という視点で行っているものであり、毎年度末に実施する学校向けアンケートでは、このような体験プログラムを含めた博物館での学習は概ね高い評価を得ている（谷口雅之　2004)。しかし一方では、大きな課題として、来館する多くの学校とは「一日だけのおつきあい」になっているという現状がある。

博物館の社会的な役割のひとつとして、「地域の人々が、自分が暮らしている町の歴史や自然に関心を持ち、自主的な活動を始めることができるように働きかけ、必要な情報を発信し、あ

るいは溜まり場を確保し、また人と人とをつなぎ合わせるような活動を行う」(布谷知夫　2003)ことがあげられる。そうした視点から見ると、「一日だけのおつきあい」は、より多くの子どもたちと関わることができる反面、その学校が在る地域との結びつきや、「その地域に対しての博物館からの働きかけ」という点においては、効果が薄いと言わざるを得ない。子どもたちの博物館での学習の本来の目的は、自分たちが暮らす地域についてよく知ることであるはずであり、博物館での学習は、学校とその周囲の地域とがより密接に結びつくための実践も大切になると考えられる。また子どもは将来の地域の担い手であるという考えに立てば、地域の情報を持っている博物館での学習こそ、地域を理解することにつながるような内容になることが望まれる。

近年の学校での総合的な学習の中では、その学校が位置する地域の歴史や伝統産業、農業などについて学ぶ例は数多く実践されており（丹青研究所　2001、丹青研究所　2002)、その際の博物館の情報を活用する例も挙げられている。しかし、博物館が学校連携事業を進めるための重要課題として、学校の周辺の地域に目を向けることで、学校連携を進めるという例はほとんどない。そのため、博物館と学校の連携だけではなく、博物館と学校と地域とを結び付けて、子どもたちが博物館を活用した学習の中で、地域に目を向けることができるような事業を計画した。

2003年に草津市の志津小学校と地域との連携により実施した「伯母川探検隊～地域の人とつくる伯母川博物館」事業は、そのような背景から生まれたものである。

3. 事業の実施

子どもたちと地域の人々がそれぞれ地域を流れる川の調査を行い、その成果を「伯母川博物館」という地域の人々に向けた１ヶ月間限定の博物館として開館した（西垣　亨（編）　2003)。この事業のねらいは、すでに述べたように、博物館の役割を明確にした、学校との連携事業のモデルとなる事業を展開することであり、その具体化のために、次の三つの方法をとった。

1）　博物館・学校・公民館の三者連携によるプログラムづくり

それぞれの代表によるプログラム開発委員会を立ち上げ、定期的に意見交換を行いながら事業の方向を決定する。

2）　地域の川を利用した学習プログラムによる子どもたちへの学習支援

自然の楽しさや生き物のおもしろさを体感しながら、そこに学芸員の専門的知識を生かした学習を展開することで、子どもたちが地域の自然に親しみ、環境学習の本来の目的である「地域を好きになること」へつなげる。

3）　地域の価値を再発見し、地域の交流の場となるような「博物館」づくり

子どもたちの学習成果や地域の人々からのメッセージを中心とした公民館内での「博物館」づくりを行う。またコミュニティの拠点である公民館に、地域の良さを詰め込んだ「博物館」

をつくることで、訪れた人びとが改めて地域の自然の価値を見直し、お互いに交流できる場を提供する。その結果、本事業が公民館活動の活性化や地域の人びとの自主的な活動へと結びつける。

事業のおおまかな流れと内容は以下の通りである。

事業の対象：滋賀県草津市立志津小学校（５年生３クラス115名）

　　滋賀県草津市立志津公民館

スケジュール

【2003年１－２月】

○志津小学校・志津公民館との連絡調整

学校、公民館ともに、事業の計画作成は前年度中に行う必要があり、方針の決定と事業のおおまかな流れの決定を２月までに行った。

【４月】

○第１回プログラム開発委員会（場所：志津公民館）

博物館からは学校担当職員と学芸員、学校と公民館からはそれぞれの代表者が出席、その他に地元である草津市環境課の職員も加えて、事業の詳細な内容や、地域グループの立ち上げなどについて議論した。

【５月】

○「琵琶湖博物館で学ぼう」

５年生115名が琵琶湖博物館へ来館し、「博物館」をつくるための学習を行った。児童115名を約20名ずつ６つのグループに分け、開催されていたギャラリー展示「のぞいてみよう博物館の舞台裏」を使っての解説（30分間）を行った。その後、約10名ずつ12のグループに分け、学芸員を先頭に展示室やバックヤードをまわりながら解説を行う「博物館ツアー」（１時間）を実施した。ここでは、展示の意義や工夫しているところ、また標本のつくりかたや生き物の展示方法などについての研修を行い、12名の学芸職員が対応した。（写真１）

写真１　琵琶湖博物館で学ぼう

○第１回伯母川生き物調査［春編］

総合的な学習の時間の中で、川の生き物調査を実施した。事前に伯母川を下見し、安全面などを考慮して設定した３ヶ所の調査ポイントをそれぞれ３つのクラスに割り当てた。午前中に２時限ずつ２クラスで２ポイントの調査、午後の２時限で残りの１クラスが１ポイントという調査日程で行った。各クラスを７～８人ずつの５つの小グループに分け、そこに学芸職員が２

～3名入るようにした。子どもたちは、学芸職員と生き物を採取（40分間）した後、分類と標本作成をしながら学芸員の話を聞いた（30分間）。この春の調査では14名の学芸職員で対応したほか（写真2）、子どもたちの安全確保のため、保護者から安全ボランティアを募った。そして子どものクラスが交代しながら、学芸員などの博物館のスタッフは順に3箇所の調査に同行した。

写真2　伯母川生き物調査

○地域の環境グループ「志津くらぶ」発足

プログラム開発委員会で議論した結果、地域の環境を考える大人のグループを立ち上げることになり、公民館からの声かけでメンバーを募り発足した。子どもたちの活動とは一線を画し、川へ流れ込む排水についての調査や、川を中心とした地域の歴史探訪など、あくまでも自分たちの興味関心での活動を行った。このグループは、秋の伯母川博物館では独自のコーナーを設け、自分たちの活動内容を元に地域への情報発信を行った。

【6月】

○志津公民館「ミニ水族館」スタート

春の生き物調査で採取した魚類を、公民館内に6台の水槽を設置して展示した。子どもたちの伯母川博物館づくりに向けての動機付けと、地域への広報活動のためのものである。

【7月】

○第2回伯母川生き物調査［夏編］

春の生き物調査と同じ3つのポイントで実施した。1年に三度行ったのは、季節による川の生き物の種類の変化や、川の周囲の植物の変化などを子どもたちに体感して欲しかったからである。この夏の調査では、10名の学芸職員が対応した。

○こどもエコクラブ「伯母Q五郎」発足

春・夏の生き物調査を終え、「もっと伯母川のことを知りたい」という思いを持った子どもたちが、保護者の協力を得て発足させたこどもエコクラブである。メンバーは14名の子どもとその保護者から成り、伯母川の外来魚調査や水質調査を行ったほか、川の源流から河口までを歩くなどの活動を行った。それらの活動成果は、秋の伯母川博物館の中で展示された。また自分たちの活動を周囲に広く発信する活動も積極的に行った。

【10月】

○第3回伯母川生き物調査［秋編］

秋の調査では、16名の学芸職員が対応し、春・夏と同じ3つのポイントを調査した。この時採取した魚類や昆虫類は、1種につき1個体だけを標本にし、残りは伯母川博物館の中で生き

たまま展示した。

○「伯母川博物館」準備期間

学芸員が学校の授業に参加し、展示の考えかたや展示の作り方、魚の飼育の仕方などについての講義を行い、子どもたちと一緒に展示物を作成した。

写真３　叔母川博物館

【11月】

○「伯母川博物館」（11．4～12．5）

公民館内の一室に17台の水槽を設置し、子どもたちが採取した魚類などの生き物を種類別に展示したほか、研究の経過やその成果などと共に、子どもたちが発案して、地域の人たちが伯母川や地域の環境をどう考えているのか、ということを中心にした1,000人分のメッセージカード等を顔写真入りで展示した。（写真３）

○パネルディスカッション「伯母川の良さって何だろう」

地域の大人と子どもの交流を深める目的で、志津小学校の子どもたちと地域の住民が公民館に集い、伯母川をテーマにしたパネルディスカッションを行った。このパネルディスカッションでは子供たちの代表もパネラーとなって、伯母川調査の経過や感想などを語った。地域住民約80名と子どもたち115名が参加した。

以上のように、調査の結果を展示することを当面の目的にして、子どもたちが川の調査を行い、琵琶湖博物館からの応援と地域の大人の手助けももらって、「伯母川博物館」を作り上げた。この一連の事業の背景には、学校教員と博物館側のスタッフおよび公民館の担当者との間での密接な協議が繰り返された。

4. 事業の成果

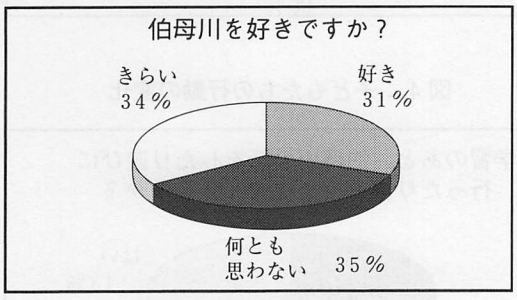
この事業の実施前（2003年４月）と実施後（2003年12月）、および実施の１年後（2004年10月）に、子どもたちやその保護者に対してアンケートを実施した。その結果から、本事業の成果についてまとめた。

１）子どもたちの意識と行動の変容

事業前（４月）と事業後（12月）に実施した子どもたちへのアンケート結果から、子どもたちの地域の川への思いが大きく変容したことがわかる（図１～２）。「伯母川は好きか？」との問いに、事業前は「好き・嫌い・何とも思わない」が３分の１ずつであったのに対し、事業後

は約90%の児童が「好き」と答えた。また、「伯母川のイメージを一言で言うと？」との問いに対しては、事業前最も多かった「汚い川」という答えから、「自然豊かな川」「生き物がいっぱいいる川」というプラスイメージへと変化した。これらのことからわかるように、川自体には何の変化はなくても、積極的に自然に働きかける活動を行うことで、地域の川の「見え方」や「考え方」が一変するのだということがわかる。将来の地域を担う子どもたちのこの意識の変容は、この事業にとっての最も大きな成果だといえる。

図１：子どもたちへのアンケート（2003年４月）



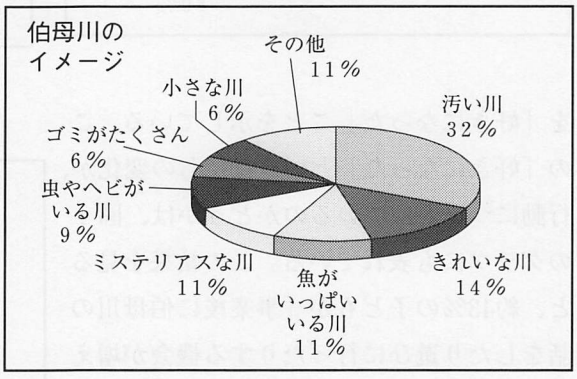
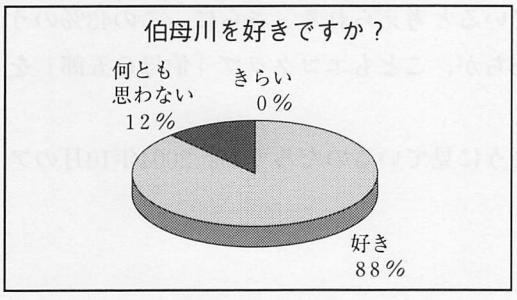
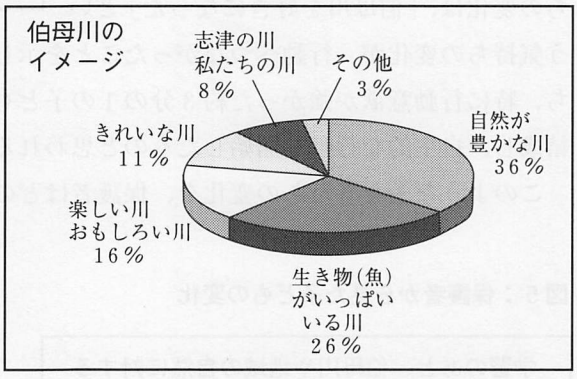


図２：子どもたちへのアンケート（2003年12月）

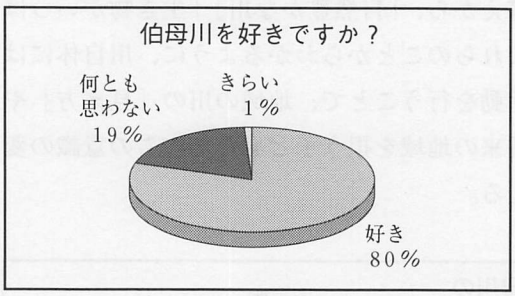


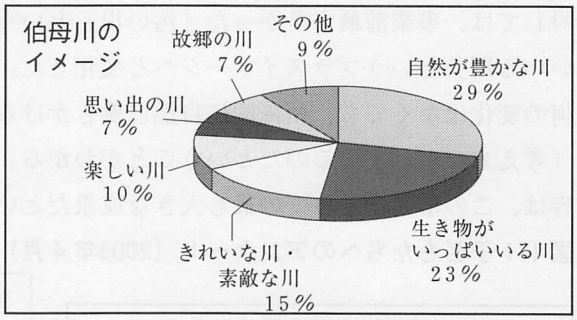


さらに、このような意識の変容が、一時的な気持ちの高まりではなかったかどうかを見るために、事業から１年後の2004年10月にも、同じ子どもたちに同様の質問をしてみた（図３）。この結果を2003年12月のもの（図２）と比べてみると、子どもたちの記憶には１年前の学習が充分に残っており、地域の川に対するイメージも事業直後とほぼ同じであることから、少なくとも１年間は、効果が継続していることがわかる。

次に子どもたちの行動の変化について考察してみた。事業前の結果（図１）と今年の結果（図３）を比べてみると、「伯母川を好きですか？」との問いに「好き」と答えた子どもは、事業前と比べて約50%増加していることになる。このことは、約50%の子どもが、新たに伯母川

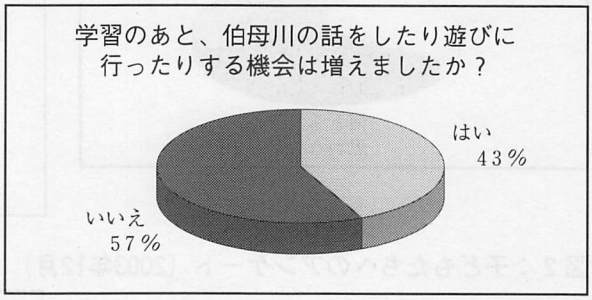
図３：子どもたちへのアンケート（2004年10月）





を「好きになった」ことを示している。この「好きになった」という気持ちの変化が、行動につながっているのかどうかは、図４のグラフにも表れている。この結果を見ると、約43％の子どもが「事業後に伯母川の話をしたり遊びに行ったりする機会が増えた」と答えている。つまり、この子どもたちの変化は、「伯母川を好きになった」という気持ちの変化が、行動へつながったことを示していると考えられる。さらに、この43％のうち、特に行動意欲が強かった約３分の１の子どもたちが、こどもエコクラブ「伯母Ｑ五郎」を結成し、自主的な行動を開始したものと思われる。

図４：子どもたちの行動の変化



このような子どもたちの変化を、保護者はどのように見ているのだろうか。2004年10月のア

図５：保護者から見た子どもの変化

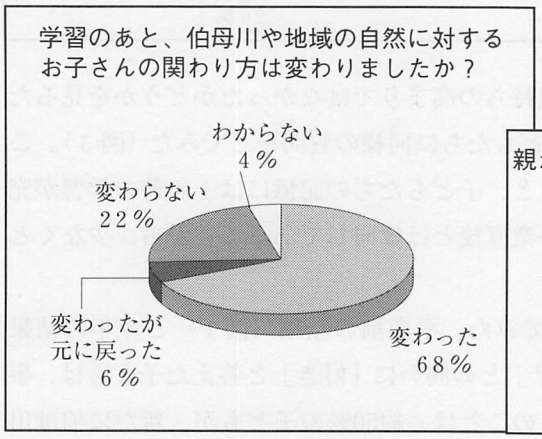
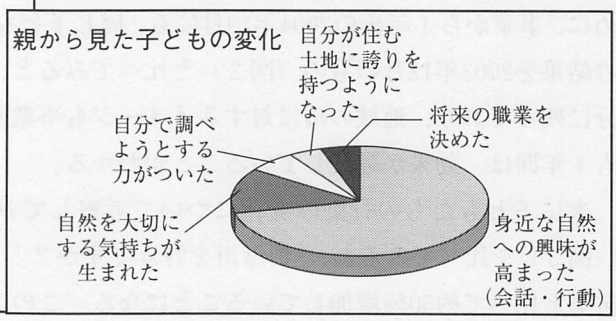


図６：子どもはどのように変わったか



ンケートで、保護者に対して「事業後に子どもに変化が見られたか」どうかを尋ねたところ、68%が「変わった」と答えた（図５）。

保護者への質問と子どもへの質問とは少し尋ね方は違うが、子どもたちが「自分は変わった」と思っている以上に、保護者は子どもが変化したと感じていることがわかる。また「どのように変わったか」という問いに対しては、「身近な自然への興味関心が高まった」という回答が７割を占めるが、中には「将来の職業を決めた」という思わぬ方向への発展も見られた（図６）。

２）事業から地域独自の動きへの発展

この事業を通して、地域の大人のグループ「志津くらぶ」とこどもエコクラブ「伯母Ｑ五郎」という２つのグループが新たに生まれた。どちらのグループもそれぞれの興味関心をもとに、独自の活動を展開し、それぞれが「伯母川博物館」の中で地域への情報発信を行った。この２つのグループは、事業が終了した後も活動を続けているが、特に「伯母Ｑ五郎」の２年目は、活動範囲や活動内容が広がっただけでなく、自分たちの得た情報を様々な場面で発信する活動も積極的に行っている。（こどもエコクラブ伯母Ｑ五郎　2004）。

これらのことが示すように、博物館が地域に働きかけることが、住民主体の新しい動きを作ることに繋がっていくことが分かった。

３）「伯母川博物館」づくりによる「地域の価値の再発見の場・地域の交流の場」としての博物館機能

「伯母川博物館」には開館した１ヶ月間で約1,500名の来館者があり、そのほとんどは地域住民であった。これらの来館者に対して、「伯母川博物館」はどのような効果をもたらせたのだろうか。残念ながら「来館者アンケート」を実施しておらず、直接来館者の声を把握するデータはないが、展示の一つである「伯母川1,000人メッセージ」のコーナーに多数寄せられた地域の人々の声や、館内で聞いた来館者の話から考えると、来館者の声は次の３つのパターンに分けることができる。

ａ．「昔の伯母川は…」（昔を懐かしむ）

ｂ．「伯母川にこんなに多くの生き物がいたとは…」（価値に気付く）

ｃ．「今度息子を連れて伯母川へ出かけてみます…」（行動につながる）

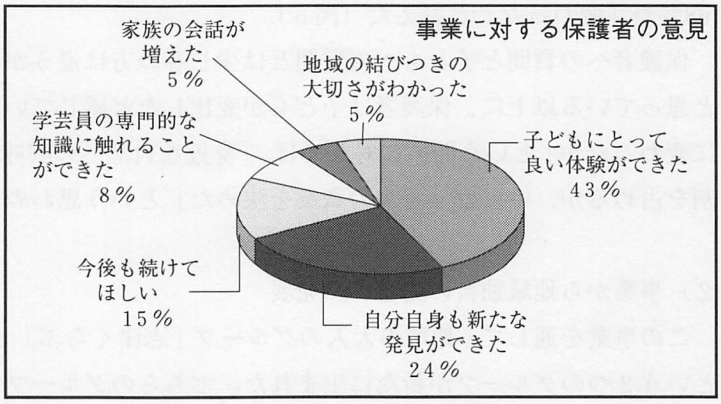
ｃの住民が実際に川へ出かけられたかどうか、残念ながら追跡調査はできていないが、このような声があがったこと自体は、前向きに成果として捉えてることができる。

次に、2004年10月に保護者向けに行ったアンケートの結果からは、98%の保護者がこの事業に対して肯定的に捉えていることがわかった（図７）。

最も多い「子どもにとって良い体験ができた」という回答と、「学芸員の専門的知識に触れる

ことができた」という回答は、子を思う親の立場としての意見である。しかし、「自分自身も新たな発見ができた」や「地域の結びつきの大切さがわかった」という回答は、親としてではなく一人の地域の大人としての意見であり、伯母川博物館が、子どもだけでなく大人にとっても地域の良さに気付く場となったことを示している。

図７：事業に対する保護者の意見



4）地域の手による事業の継続

2004年度の伯母川探検隊事業は、こどもエコクラブ「伯母Ｑ五郎」が主催者となり、地域の子どもたちを集めて実施されている。2004年８月から三度行われた川調査には、応募した子どもたちとその家族約30組の参加があった。今年度の伯母Ｑ五郎は、地元の川や池の調査をはじめ地域に密着した様々な活動を展開しており（こどもエコクラブ伯母Ｑ五郎・ホームページ）、2003年度の活動の中で県や市とのつながりが生まれたことから、今後さらに活動内容は発展していくと考えられる。また、伯母Ｑ五郎からの提案で2004年８月に志津地域に「伯母川博物館実行委員会」が設立され、この委員会の働きで2004年11月20日に志津公民館内に「伯母川博物館」が再び開館した。今年の展示物は、伯母Ｑ五郎の活動成果のパネルや、志津小学校４年生の伯母川探検（総合的な学習）で採取された魚類、さらに実行委員会が集めた地域住民からのメッセージ約1000枚等によって構成されている。2004年11月20日から２日間にわたって行われた志津地域の祭りでは、昨年同様多くの来館者でにぎわった。

昨年と今年の「伯母川博物館」を比べた場合、琵琶湖博物館主導でつくられた昨年のものの方が、そのテーマ性や展示内容を見ても当然立派なものができていた。しかし、内容の善し悪しは別として、今年の「伯母川博物館」が純粋に地域住民の手のみでつくられたことを考えれば、今年の「博物館」が持つ意味は極めて大きいと言えるだろう。

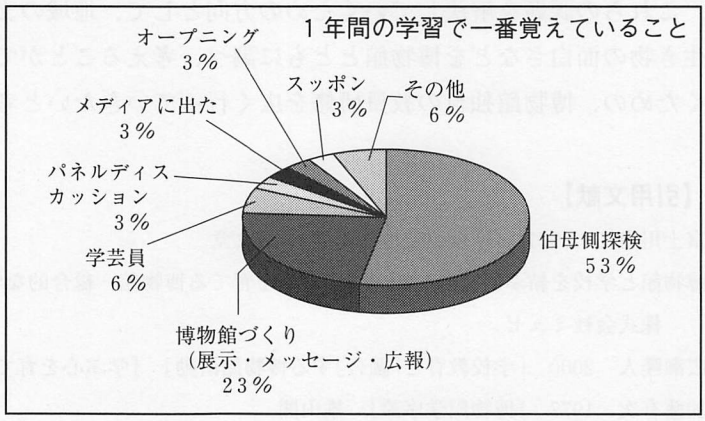
このように、2003年度の琵琶湖博物館事業が地域の手で継続されていることも、この事業の成果であり、三者連携の一つの効果であると考えられる。しかし、博物館事業は地域に対して少しのきっかけを与えたに過ぎない。実際に地域で事業が継続した大きな理由は２つある。一つは、学校と地域をつないだり、こどもエコクラブの活動をうまくコーディネートしたりする人材に恵まれたことである。またもう一つは、子どものために何とか動いてやろうという気持

ちを持った地域住民が、伯母Ｑ五郎のサポーターを始め、地域にたくさんいたということであろう。

ただ、その２つの理由があるとしても、子どもたちが「もっと活動したい」という気持ちを持っていなければ事業の継続はなかったであろう。子どもたちを突き動かしたものは何だったのだろうか。

図８は、2004年10月に子どもたちに対してとったアンケートで、「昨年１年間の学習の中で１番覚えていることは何か」という質問に対する答えである。これによると、過半数の子どもたちが「伯母川探検」と答えている。子どもたちが伯母川に入った時間は、博物館づくりにかけた時間よりもはるかに短いし、完成した博物館は約１ヶ月間も開館した。しかしそれ以上に、子どもたちにとっては、川の中でずぶ濡れになって魚や虫をとったことの方が記憶に残っているのである。学芸員と共に経験した自然体験のおもしろさ、生き物のおもしろさ。それらが、一部の子どもたちを動かし、行動の発展へとつながっているのではないかと考えられる。

図８：昨年１年間の学習で一番覚えていること



5. まとめ

今回の事業は、より効果的な学校連携を行うためには、学校だけでなくその背景にある地域との三者連携が必要であると考えて実施したものである。これまでの結果が示すとおり、博物館・学校・地域（公民館）の三者連携を行い、そこに博物館からの働きかけによる学習の場を設定することで、子どもたちの、また大人も含めて、地域の自然に対する見方や考え方が変わり、地域に対して自主的に働きかけようとする力が生まれてくる。また、三者連携による事業は、通常担当教員の転勤などで止まってしまうことが多い学校連携事業に比べ、地域の中で継続する力が生まれやすい。これは博物館が持つ地域の情報と学芸員の知識などを生かして、学校の子どもたちや地域の人々に効果的な対応を行うことで実現することができたものである。

本文中にあるとおり、2003年度にこの事業が行われた後、2004年度には、こどもエコクラブ「伯母Ｑ五郎」が中心となり、志津小学校と琵琶湖博物館の協力によって、継続して「伯母川博物館」づくりが行われた。

一方で事業を進める上での課題も見つかった。それは地域の団体への働きかけの難しさと、学校内における事業の継続の難しさである。どちらも人的資源にかかわる課題であり、プログラム作りとは別ではあるが、現実的にはもっとも困難な課題として挙げられる。また博物館にとっても、プログラムを作るためのモデル事業として行われたものであるために、毎年同じ規模で継続して行うことは考えておらず、そのことが地域での継続にも影響を与えることになっている。

これらの課題を解決していくための方向として、地域の文化や歴史、暮らし、そして自然や生き物の面白さなどを博物館とともに調べ、考えることができるような教員の数を増やしていくための、博物館独自の教員研修を広く行っていきたいと考えている。

【引用文献】

富士川金二　1971『増補改定博物館学』成文堂

博物館と学校を結ぶ研究会　2000『学ぶ心を育てる博物館－総合的な学習の時間への最新実践例』株式会社ミュゼ

広瀬隆人　2000「学校教育と「融合」する博物館活動」『学ぶ心を育てる博物館』株式会社ミュゼ　100－116.

加藤有次　1977『博物館学序論』雄山閣

倉田公裕　1979『博物館学』東京堂出版

倉田公裕（編）1979『博物館教育と普及』博物館講座８　雄山閣

こどもエコクラブ伯母Ｑ五郎「伯母Ｑ五郎の活動」h ttp://www.nona.dti.ne.jp/~n-yasu/oba_Q/（2005年１月検索）

国立教育政策研究所社会教育実践センター　2003『博物館に関する基礎資料』国立教育政策研究所社会教育実践センター

中山静郎・栗栖宜博　1997「学校と連携した教育普及活動の創造―研究協力校を指定しての学習ノートの作成」『日本ミュージアムマネージメント学会紀要』１（２）１－10.

西垣　亨（編）2003『伯母川博物館ものがたり』琵琶湖博物館

布谷知夫　2003「日本における地域博物館という概念」『博物館學雑誌』28（２）. 67－76.

大堀　哲（編・著）1997『教師のための博物館』東京堂出版

田辺悟　1985『現代博物館論』暁印書館

丹青研究所　2001「総合的学習とミュージアム」教育新聞連載（２月26日～12月24日）10回

丹青研究所　2002「総合的学習とミュージアム」教育新聞連載（１月31日～３月25日）３回

谷口雅之　2004「学校のよりよい博物館利用をめざして」『うみんど』(32) ２－3.

樽創・田口公則・大島光春・今村義郎　2001「博物館と学校の連携の限界と展望―中間期間設置モデルの提示―」『博物館学雑誌』26（２）１－10

※本事業は、科学技術振興機構平成15年度地域科学館連携支援事業の支援を受け実施したものである。